よろこびの知らせ

—礼拝メッセージより—

29

よろこびの知らせ
第 29 集

目　　次

私の隣人 …… 1
ルカ 10:29-37

私を生かす方 …… 10
ルカ 12:13-21

あなたが共に …… 19
詩篇 23:1-6

見つけ出した喜び …… 28
ルカ 15:1-7

ここに収められたメッセージは、2022 年 1～2 月にテキサス州プレーノ市にある永楽長老教会の日本語礼拝で語られたものです。聖句は新改訳聖書第二版より引用しています。

© 2022, Philip Nakao

私の隣人
ルカ 10:29-37

10:29 しかし彼は、自分の正しさを示そうとしてイエスに言った。「では、私の隣人とは、だれのことですか。」
10:30 イエスは答えて言われた。「ある人が、エルサレムからエリコへ下る道で、強盗に襲われた。強盗どもは、その人の着物をはぎとり、なぐりつけ、半殺しにして逃げて行った。
10:31 たまたま、祭司がひとり、その道を下って来たが、彼を見ると、反対側を通り過ぎて行った。
10:32 同じようにレビ人も、その場所に来て彼を見ると、反対側を通り過ぎて行った。
10:33 ところが、あるサマリヤ人が、旅の途中、そこに来合わせ、彼を見てかわいそうに思い、
10:34 近寄って傷にオリーブ油とぶどう酒を注いで、ほうたいをし、自分の家畜に乗せて宿屋に連れて行き、介抱してやった。
10:35 次の日、彼はデナリ二つを取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『介抱してあげてください。もっと費用がかかったら、私が帰りに払います。』
10:36 この三人の中でだれが、強盗に襲われた者の隣人になったと思いますか。」
10:37 彼は言った。「その人にあわれみをかけてやった人です。」するとイエスは言われた。「あなたも行って同じようにしなさい。」

イエスは「たとえ話」を使って人々を教えました。福音書にはイエスの話された「たとえ話」が 39 あるのですが、その半分近くの 17 の「たとえ話」は、ルカの福音書にしか書かれていません。有名な「良いサマリヤ人」と「放蕩息子」の「たとえ」は両方とも、ルカの福音書にあります。きょうはそのうちのひとつ「良いサマリヤ

人」のたとえを取り上げます。

一、律法学者の質問

きょうの箇所に登場する「サマリヤ人」は、強盗に襲われたユダヤ人を助け、親切にしてあげました。それで、このたとえは「良いサマリヤ人のたとえ」と呼ばれるようになりました。ニュースでは、人助けをして、名前も告げずに去って行った人のことを “A Good Samaritan” と呼びます。「良いサマリア人が小さな子どもを助けた」などと言われます。また、多くの慈善団体が “Good Samaritan” という名前を持っています。Good Samaritan Hospital、Good Samaritan Society, Samaritan Inn などたくさんあり、それぞれ無料で医療や食べ物、また宿泊施設を提供しています。多くの人が「良いサマリア人」のたとえに教えられ、困っている人々を助けることに励んできたことは、とても素晴らしいことです。

しかし、この箇所は、「進んで他の人を助ける親切な人になりましょう」ということを教えるだけものではありません。これは、「自分の正しさを示そうとした」律法学者に対する言葉でした（29 節）。この律法学者は、「先生、何をしたら永遠のいのちを自分のものとして受けることができるでしょうか」とイエスに質問しました。しかし、それはほんとうに「永遠のいのち」を求めてのことではなく、「イエスをためそうとして」言ったことでした（25 節）。もしイエスの答えに、何か落ち度があれば、それを口実に批判しようとしたのでしょう。イエスはその動機を見抜き、「律法には何と書いてあり

ますか。あなたはどう読んでいますか」と、律法の専門家であるこの人に、逆に質問しました。

すると、この人はさすがに律法の専門家だけあって、即座に、「『心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』また『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』とあります」と答えました（27 節）。これは正しい答えです。イエスも、別の人が「先生。律法の中で、たいせつな戒めはどれですか」ときいたとき、同じように答えておられます。

イエスと律法学者は同じ答えを持っていましたが、イエスとこの律法学者には違いがありました。イエスは、この律法の言葉通りに生きておられましたが、律法学者はそうではありませんでした。当時の知識人たちは、立派なことを語りますが、実際にしていることは、自分たちの利益や名誉を追求することだけでした。それでイエスは、ある時、こう言われました。「律法学者たちやパリサイ人たちはモーセの座に着いています。ですから、彼らがあなたがたに言うことはみな、行ない、守りなさい。けれども、彼らの行ないをまねてはいけません。彼らは言うことは言うが、実行しないからです。」（マタイ 23:2-3）とても辛辣な言葉ですが、いつの時代も、知識人と呼ばれる人たちは、多くの場合、分かったようなことを言っていても、自分では何ひとつそれを実行していないものです。

この律法学者は、イエスをキリストと信じてはいませ

んでしたが、人々が言うように預言者としては認めていただろうと思われます。そうであるなら、神が遣わされた預言者を「試そう」とすることは、「心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神である主を愛せよ」との御言葉に反することになります。また、自分の目の前にいる、文字通りの「隣人」であるイエスに悪意を抱いていることが、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」という御言葉に反していることも、明らかなことです。この律法学者は、律法が永遠のいのちに至る道であると言いながら、自分はその律法を守っていなかったのです。それでいて、彼は、自分が律法を守っているかのように振る舞おうとしました。それで、「では、私の隣人とは、だれのことですか」とイエスに質問したのです。彼にとっての「隣人」とは、ユダヤの同胞であり、同じパリサイ人の仲間のことでした。そうであるなら、自分は「隣人を愛せよ」との戒めを守っていると思っていました。彼は、イエスが自分の考えに近い答えを出すだろうと期待して、そう質問したのです。

二、イエスの答

ところが、イエスの答えは、違っていました。イエスはそのたとえの中に「サマリヤ人」を登場させることによって、「隣人」という言葉を定義し直したのです。

イエスのたとえでは、ひとりのユダヤ人がエルサレムからエリコに下る道で強盗に襲われています。そういったことは、当時よくあったことでした。ユダヤの祭司

は、強盗に半殺しにされた人を見ても、助けようともせず、道の反対側を通り過ぎていきました。レビ人も同じでした。ふたりとも、強盗がまだどこかに潜んでいるかもしれないと思い、自分たちの身の安全を第一に考えたのでしょう。二人は、ユダヤ人であり、しかも、神殿で神に仕えている人たちでしたが、自分たちの「同胞」であり、「隣人」であるはずのユダヤ人を見捨てたのです。

ところが、そこに通りかかったサマリヤ人がこの人を助けました。「サマリヤ人」とは、もとは同じユダヤ人でしたが、後にユダヤの人々から差別されるようになった人々のことです。ユダヤの国はソロモン王の後、北王国イスラエルと南王国ユダとに分裂してしました。北王国の王たちは、サマリヤに自分たちの神殿を作るようになり、それによって北王国の人々は正しい信仰から離れていきました。預言者エリヤやエリシャが北王国の人々を正しい信仰に戻そうとしましたが、彼らの死後、人々は急速に神から離れ、ついに、北王国はアッシリア帝国に征服され、アッシリア人との混血の人々が多く生まれました。それが「サマリヤ人」で、ユダヤの人々からは純粋なユダヤ人とは見なされず、とても軽蔑されていました。ですから、そこに通りかかったサマリヤ人から見れば、この傷ついたユダヤ人は「隣人」などではなく、「敵」であり、「仇」でした。祭司やレビ人がこの人を助けないで通り過ぎたのはけしからぬことですが、サマリヤ人の場合は、通り過ぎたとしても不思議ではなかっ

たのです。ところが、このサマリヤ人は、自分にとって「隣人」とは言えないユダヤの人の命を救い、手厚く介抱しています。

イエスは、このように話してから律法学者に言いました。「この三人の中でだれが、強盗に襲われた者の隣人になったと思いますか。」（36節）律法学者は、「サマリヤ人」という言葉を口にしたくなかったのでしょうか、「その人にあわれみをかけてやった人です」と答えました。イエスは、「誰が隣人であるか」ではなく、「誰が隣人になったか」と言っておられます。「私の隣人とは誰でしょう」という質問に対して、「誰が隣人であり、誰が隣人でないということはない。私たちがその人の隣人になるか、ならないかが問題なのだ」と言われたのです。

「その人にあわれみをかけてやった人です」と答えた律法学者に、イエスは、さらに、「あなたも行って同じようにしなさい」と言われました。「サマリヤ人がユダヤ人にあわれみの心を持ち、実際に助けを与えたように、立場を替えて、ユダヤ人であるあなたも、サマリヤ人にあわれみの心を持ち、助けを与えなさい。そしてサマリヤ人の隣人になりなさい」と言われたのです。律法学者は、そうしたでしょうか。いいえ、しなかったでしょうし、できなかったでしょう。この律法学者は、依然として自分を正しいとしていたからです。彼は、このたとえ話とイエスの言葉によって、自分が今まで律法を守ってこなかったし、これからも守れないということを認める

べきでした。律法によっては「永遠のいのち」を得ることができない、つまり、人は、自分で自分を救うことができないことを知るべきだったのです。

三、良いサマリア人であるイエス

では、どうしたら「永遠のいのち」を得ることができるのでしょう。律法学者は、「何をしたら…」と言いましたが、そもそもこの考えが間違っています。永遠のいのちは、何かをして、それと引き換えに得るものではないからです。聖書は、こう教えています。「罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。」（ローマ6:23）「永遠のいのち」は神からの賜物、ギフトです。自分の力で勝ちとるものではなく、信じて受け取るものです。「私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのち」とあるように、「永遠のいのち」を与えてくださるのは、イエス・キリストです。「私たちの主キリスト・イエス」、この言葉にはイエスが「キリスト」、つまり、救い主であること、また「主」、神があることが言われています。しかも「私たちの主」という言葉は、これは旧約で「アドナイ」（わが主）と呼ばれた、人とともにいてくださる神を指しています。イエス・キリストは、どこか遠いところにおられる神ではなく、この地上に来てくださったお方、世の終わりまでも私たちと共にいてくださるお方です。神のみこころを知っていながらそれを実行できないで葛藤を覚えているような私たちひとりびとりと共にいて助け、導いてくださるお方で

す。私たちには、「私の主」、“My Lord,” “My Jesus” と呼び求めることのできるお方がおられます。私たちは、このお方、主イエス・キリストから「永遠のいのち」と、そこから生まれる、あらゆる祝福、恵み、力、導き、助けを受けたのです。

古代から、きょうの箇所で強盗に襲われた人は、私たち、罪びとのことで、彼を助けた「良いサマリヤ人」はイエス・キリストのことだと、解釈されてきました。イエスはユダヤ人としてご自分の民のところに来られたのに、ユダヤの人々は、「サマリヤ人」を扱うのと同じようにイエスを扱い、自分たちの仲間からはじき出し、蔑みました。祭司やレビ人が強盗に襲われた人を避けて通ったように、ユダヤの古い宗教は、人々の苦しみに知らん顔をしていましたし、人々を苦しみから救う力もありませんでした。しかし、イエスは、サマリヤ人が怪我人に目をとめ、あわれみの心を持ったように、苦しむ人々を心からあわれんでくださいました。サマリヤ人が自分の荷物の中からオリーブ油やぶどう酒、包帯を取り出し、介抱したように、イエスもまた、心だけでなく、手足も使って、人々の魂とからだの傷を包み、いやしてくださいました。たとえ話の中で、サマリヤ人は自分の持っていたお金を怪我人のために惜しみなく使っていますが、イエス・キリストはそれ以上のもの、ご自分の命さえも使いつくし、私たちを救ってくださったのです。

聖書に「子どもたちよ。私たちは、ことばや口先だけで愛することをせず、行ないと真実をもって愛そうでは

ありませんか」（ヨハネ第一 3:18）と教えられていますが、そのように「行いと真実」で私たちを愛してくださったのはイエス・キリストです。「良いサマリヤ人」であるイエス・キリストに救われ、助けられ、その愛とあわれみ、親切を受けて、はじめて、私たちも、イエスに倣って、誰かにとっての「良いサマリヤ人」になることができるのです。誰もが、「良いサマリヤ人」のようでありたいと願っていますが、自分を守ることが先になったり、良いことをする勇気がなかったり、自分の狭い心の殻を破れなかったり、偏見を乗り越えられなかったりして、私たちは「隣人」になりきれないでいます。そんな私たちに必要なのは、イエス・キリストです。私たちも、行いと真実をもって他を愛することができるため、日々、このお方に助けを祈り求めていきましょう。

（祈り）

父なる神さま、自分で自分を救うことのできない私たち、あなたの律法を守ることのできない私たちのために、あなたは救い主イエス・キリストを与えてくださいました。私たちはどんなに大きな愛とあわれみ、助けを主から頂いていることでしょうか。どうぞ、それらを他の人にも分け与え、それぞれの場で「良いサマリヤ人」となることができるよう、助け、導いてください。主イエス・キリストのお名前で祈ります。

私を生かす方
ルカ 12:13-21

12:13 群衆の中のひとりが、「先生。私と遺産を分けるように私の兄弟に話してください。」と言った。
12:14 すると彼に言われた。「いったいだれが、わたしをあなたがたの裁判官や調停者に任命したのですか。」
12:15 そして人々に言われた。「どんな貪欲にも注意して、よく警戒しなさい。なぜなら、いくら豊かな人でも、その人のいのちは財産にあるのではないからです。」
12:16 それから人々にたとえを話された。「ある金持ちの畑が豊作であった。
12:17 そこで彼は、心の中でこう言いながら考えた。『どうしよう。作物をたくわえておく場所がない。』
12:18 そして言った。『こうしよう。あの倉を取りこわして、もっと大きいのを建て、穀物や財産はみなそこにしまっておこう。
12:19 そして、自分のたましいにこう言おう。「たましいよ。これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ、安心して、食べて、飲んで、楽しめ。」』
12:20 しかし神は彼に言われた。『愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。そうしたら、おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。』
12:21 自分のためにたくわえても、神の前に富まない者はこのとおりです。」

ここに 100 ドル冊があります。本物ではありませんが、偽札でもありません。これは、福音を伝えるためのパンフレットで、“Money Tract” と呼ばれています。その裏にはこう書かれています。「お金で、ベッドは買えても眠りは買えない。本は買えても頭脳は買えない。食べ物は買えても食欲は買えない。飾り物は買えても美しさは買

えない。家は買えても家庭は買えない。薬は買えても健康は買えない。贅沢は買えても文化は買えない。楽しみは買えても幸せは買えない。十字架のペンダントを買えても救い主は買えない。教会の座席は買えても天国の場所は買えない。」その通りで、これらは確かな事実なのですが、お金さえあれば何でも手に入ると思っている人は少なくありません。そういう人はお金では買えない大切なものを見失っています。ある大金持ちが、死の直前に「カネはいくらでも出す。命を助けてくれ」と叫んだそうですが、もちろん、それは無理なことです。命はお金では買えないものだからです。きょうは、イエスのたとえ話から、自分を生かしているものが何なのかを考えてみたいと思います。

一、金持ちの悩み

このたとえ話は「ある金持ちの畑が豊作であった」（16 節）という言葉から始まっています。この人はすでに十分に金持ちなのに、その上に自分が持っている畑が、今年も豊作だったのです。財産のあるところにはさらに財産が増し加わるという、この世の現実がよく描かれています。

それで、この金持ちは「どうしよう。作物をたくわえておく場所がない」（17 節）と心配しはじめました。贅沢な悩みです。多くのものを持つと、それだけ悩みや心配ごとが増えるのです。今日のたとえ話のすぐあとでイエスは「何を食べようか…、何を着ようかと、…心配したりするのはやめなさい」（ルカ 12:22）と言われまし

た。それは、食べ物にも着る物にも事欠く人々に対して、神が必要なものをくださると教えているのですが、現代の裕福な人々もまた「何を食べようか」と思い煩っています。「フレンチにしようか、イタリアンにしようか、チャイニーズにしようか」というわけです。クローゼットにたくさんの服を持っている人も「何を着ようか」と、服を選ぶのに悩んでいます。「何を食べようか…、何を着ようか」という心配は、貧しい人だけのものではないのです。多くの財産を持つ人の中には、株が暴落しないだろうか、事業に失敗して、一夜にしてホームレスにならないだろうか、自分の邸宅のセキュリティを破って強盗が侵入しないだろうかと、戦々恐々としている人も多いことでしょう。

聖書は財産を否定していません。正しい手段で得た財産は神の祝福のしるしだと教えています。しかし、自分の財産に頼って神を忘れる、財産を保つために思い患いを増やす、それが原因で家族や友人とのいさかいが生じるのなら、自分が管理できる分だけに減らして、できるだけシンプルな生活を目指すのがいいのです。人生は時間で成り立っています。人の人生にはそれぞれ限られた日数しかないのです。その貴重な日数を、必要以上の金銭を得るために使ってしまうのは、「もったいない」ことなのです。

二、金持ちの解決策

この金持ちは「どうしよう。作物をたくわえておく場所がない」と心配しましたが、即座に、その解決策を発

見しました。そして、言いました。「こうしよう。あの倉を取りこわして、もっと大きいのを建て、穀物や財産はみなそこにしまっておこう。」何も今まであったものを壊さなくても、その隣にもう一つ建てればよかったと思うのですが、彼は一つの大きな倉に自分の財産をすべてをしまいこもうとしたのです。豊作が続いて、その大きな倉が穀物で、毎年いっぱいになっていく光景を、彼は思い浮かべたことでしょう。そして、こう言いました。「たましいよ、おまえには長年分の食糧がたくさんたくわえてある。さあ安心せよ、食え、飲め、楽しめ。」（19節）

ところが、神はこの金持ちに言われました。「愚か者、おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。」（20節）彼に神の裁きが臨んだのですが、いったい、この金持ちのどこが悪かったのでしょうか。

一つのことは、神を無視したことにありました。彼の人生を、ほんとうの意味で豊かにし、幸いで満たしてくださるのは神です。それなのに、彼は、自分を生かしているものが、彼の財産だと思いこんでいたのです。「たましいよ。これから先何年分もいっぱい物がためられた」（19節）との言葉がそれを表しています。彼は、自分の命が、その財産によって支えられていると思い込み、倉の中の穀物が増えれば増えるほど寿命が長くなるとさえ考えていたのです。しかし、人を生かすものは財産ではありません。イエスは「人のいのちは財産にある

のではない」（15 節）と、はっきり言っておられます。私たちに命の息を吹き込み、私たちを生かしておられるのは神です。神がそれを取り去られるなら、私たちの命はたちまち終わってしまうのです。この金持ちは命の与え主である神を忘れていました。

二つ目は、人生の意味と目的を見失っていたことです。彼は言いました。「さあ、安心して、食べて、飲んで、楽しめ。」ここでいう「安心」は、本物の「平安」ではありません。たんなる気休めです。「食べて、飲んで、楽しめ」というのは快楽を指していて、本当の「喜び」を意味していません。私たちがこの世に生まれ、ここに生かされているのは、そんな束の間の快楽に浸るためではありません。たとえ日々の生活が厳しいものであっても、そこに神から来る「平安」を見つけて生きるためです。この世の楽しみからほど遠かったとしても、たましいのうちに「喜び」を感じ取るためです。

イエスは、世の終わりについて、こう言われました。「人の子の日に起こることは、ちょうど、ノアの日に起こったことと同様です。ノアが箱舟にはいるその日まで、人々は、食べたり、飲んだり、めとったり、とついだりしていたが、洪水が来て、すべての人を滅ぼしてしまいました。」（ルカ 17:26-27）ノアの時代、人々は洪水が来ることを気にもかけず、「食べたり、飲んだり」していました。そのような人々に、その世代の終わりが臨んだのです。「食べたり、飲んだり」、つまり、地上の事柄だけに没頭する人生を送っている人に、「人生の終

わり」が突然のようにしてやってくるとき、その人はどんなに後悔しなければならないことでしょうか。

三つ目に、この金持ちは、極めて利己的な生き方をしていました。それは彼の言葉の中に見ることができます。彼は言いました。「どうしよう。〈わたしの〉作物をたくわえておく場所がない。…こうしよう。あの〈わたしの〉倉を取りこわして、もっと大きいのを建て、〈わたしの〉穀物や財産はみなそこにしまっておこう。そして、〈わたしの〉たましいにこう言おう。」日本語では訳されていませんが、作物、倉、穀物の全てについて「わたしの…」、「わたしの…」と言っているのです。どれも神からの贈り物であるのに、自分一人の力で得たかのように思いあがり、それを独り占めしようとしています。最後には「〈わたしの〉たましい」と言っています。「たましい」には「命」という意味もありますので、彼は、命が神からの賜物であることを否定して、まるで、自分が自分を生かしているかのように考えていたことが分かります。

三、金持ちのたとえから学ぶもの

皆さんは、このたとえ話からどんなことを学びましたか。これは、私たちに、どのような人生を送るよう教えているのでしょうか。

第一に、「賢い人生」を送ることです。この金持ちのたとえには「愚かな金持ち」（“Rich Fool”）というタイトルがついています。神がこの金持ちに「愚か者」と言われたからです。この金持ちは、人間的には、才能も才

覚もありました。だから、彼は大勢の小作人を持つ地主になり、畑の管理も良かったので大きな収穫を得たのです。しかも、大きな収穫を得たからといって浪費せず、将来のためにそれを蓄えようとしました。ですから、本人も、他の人も彼を「賢い人」とみなしていたと思います。しかし、神は彼に「愚か者」と言いました。人として知らなければならない最も大切なことを知らなかったからです。この人もユダヤの人でしたから、知識としては神を知り、宗教儀式を守り、神の言葉を聞いていたでしょう。しかし、彼は、自分の人生から神を締め出していました。聖書は「愚か者は心の中で、『神はいない』と言っている」（詩篇 14:1、53:1）と言います。また、「主を恐れることは知識の初め」（箴言 1:7）と教えています。神が私の造り主であり、私を生かし、養い、支えてくださっているお方であることを知る、これが知識の初めです。物事や人間関係をうまくやり繰りしていく知恵や技術があるからといって、その人がほんとうに賢いとは言えません。神を知らないために、いや、知ろうとせず、認めようとしないために、そうした知恵や技術がかえってその人の仇となることもあるのです。

第二に、感謝のある人生を送ることです。この金持ちは、大きな収穫を得て喜びました。農業の場合、大きな収穫を得ることができるのは人間の力だけにはよりません。その年の天候、気象が大きく作用します。せっかくの実りが収穫前にいなごに食い荒らされてしまうこともあります。神の守りと祝福なしには、どんな収穫も得ら

れません。ところが、この金持ちは、まるで自分がこの収穫をもたらしたかのように収穫を自慢し、得意になっています。まずは収穫の初物をささげて神に感謝しなければならないのに、彼の言葉には「感謝」の「か」の字さえありません。感謝のない人生ほど、虚しい人生はありません。その人生は、この金持ちのように高慢な生き方を続けて、最後に神に打たれるか、毎日を不満の中に過ごすかのどちらかで終わってしまうのです。

第三に、このたとえ話は、神から与えられた祝福を他の人と分け合う人生を教えています。このたとえは、貪欲を戒めるために語られたものですが、「貪欲」の反対は「分かち合い」です。貪欲とは、すべてを「わたしのもの」と言って、独り占めすることです。この金持ちには、倉に収まりきらなかった収穫を、人々と、とくに貧しい人々と分け合うという選択もあったのですが、彼はそれを選びませんでした。彼は、倉に入り切らない収穫について、それをどうしたらよいか神に祈って尋ねていませんし、他の人とも相談していません。自分ひとりで、「どうしょう」と問い、「こうしょう」と答えています。神や他の人との対話も会話もない、まったく彼の中だけでの独り言で終わっています。彼のように、自分の思いを誰とも分かち合うことなく、自分の考えから一歩も出ない生き方は、人生を誤らせてしまうのです。

私たちの人生をほんとうに豊かにするものは、どれもお金では買えないものばかりです。最初に紹介した“Money Tract” には続いてこう書かれていました。「お金

で買えないものを、イエス・キリストは私たちに無代価で与えてくださる。」イエスは、ヨハネ 10:10 で、「わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです」と言っておられます。賢こい人生、感謝にあふれた人生、他の人々と分かち合いながら生きる豊かな人生は、イエスから来るのです。主がくださるこの豊かな人生を、イエスを信じることによって、受け取ろうではありませんか。

（祈り）

父なる神さま、イエスは私たちの貪欲を戒めるため、たとえを語ってくださいましたが、そればかりでなく、貪欲を含む罪から、私たちを救うため、その尊い命を注ぎ出してくださいました。その命を私たちに与え、私たちを生かしてくださいました。私たちは、きょう、もう一度、イエス・キリストに信頼します。私たちを、イエスが与えてくださる豊かな人生に生きる者としてください。主イエスのお名前で祈ります。

あなたが共に
詩篇 23:1-6

23:1 主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。
23:2 主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。
23:3 主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。
23:4 たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。
23:5 私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、私の頭に油をそそいでくださいます。私の杯は、あふれています。
23:6 まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。

一、満たされた人生

人はなぜ信仰を求めるのでしょうか。一つには、自分に満たされないものを感じるからだと思います。人には、生きる意味や目的が必要です。私の場合、子どものころ、そのことを親に聞いても、「人に迷惑をかけないように生きればいいのだ」という答えしか返ってきませんでした。学校の先生に聞いても、「よく勉強して大学に入れば分かるようになる」という答えでした。私が大学で最初に聞いた講義は唯物論で、そこには何の答えもありませんでした。その時、教授が何度も繰り返した“*Sachlichkeit*”（即物性、客観性）というドイツ語を未だに覚えています。「どう生きるか、いかに生きるか」と

いうことに答えてくれるものは沢山あります。しかし、「なぜ、何のために生きるのか」を教えてくれるものはありませんでした。私は仏教にも興味があって勉強しましたが、仏教も「どう生きるか」ということは教えても、「なぜ、何のために生きるのか」には答えてくれませんでした。「なぜ、何のために生きるのか。」この人生にとって一番基本的なことを、聖書に出会うまでは知りませんでした。

また、人は誰も、愛され、また愛することを求めています。人は、頭脳だけで成り立っていません。何かを知れば、それですべてが解決するわけではありません。人の魂は知識だけでは満たされないのです。日本では高校に「情報」という科目を加え、コンピュータのプログラミングを教えるそうですが、そういうものは選択科目にあってもいいでしょうが、必須科目にする必要があるのだろうかと思います。歴史や文学などが軽んじられ、IQ（Intelligence Quotient）だけが追求されています。それでは、いびつな社会しかできませんので、EQ（Emotional Quotient）というものも唱えられるようになったのですが、これも「どうやって感情を管理するか」だけに関心が集中するようになっているのは残念です。真実なもの、とりわけ真実な愛は、数値で測ることはできません。よく、「あの人は心の温かい人だ」と言いますが、そのような温かさがサーモメーターで測れないのと同じです。まして、神は私たちを熱く愛してくださっているのですが、その愛は、私たちの思いをはる

かに超えています。私に、私を愛してくださる神を教え、その愛を知らせてくれたのも聖書でした。

また、人は、霊や魂だけでなく、身体を持って生きていますから、内面のものが満たされるだけでなく、健康が支えられ、食べ物や着る物など目に見えるものにも満たされる必要があります。聖書は、神が私たちの必要を満たしてくださることを教えています。詩篇 37:25 にこうあります。「私が若かったときも、また年老いた今も、正しい者が見捨てられたり、その子孫が食べ物を請うのを見たことがない。」また、ヨハネの手紙第三 1:2 に「愛する者よ。あなたが、たましいに幸いを得ているようにすべての点でも幸いを得、また健康であるように祈ります」とあります。

私には、ずっと相談相手になっていただいている先輩の牧師があります。誠実で、勤勉で、よく人の世話をする方です。柔和ですが、聖書の教えにおいては妥協することはありません。それで、ごくわずかですが、この先生を嫌って、何かというと反対の意見を言う人たちがいました。みなこの先生より若い人たちでした。ところが、その人たちが次々身体が弱ったり、中には急に亡くなったりしていきました。けれども、この先生は様々な面で祝福を受け、90 歳になった今も片道 20 マイルを運転して、毎週説教をしておられます。神は生きておられ、忠実な人を、目に見えない霊や魂ばかりでなく、生活や健康においても祝福してくださるということを、私は目の当たりにしています。神が、信じる者を、あらゆる必

要で満たしてくださる。それが真実であることを、しみじみと味わっています。

「主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。」（1節）皆さんも、他の人のことを見聞きし、また、自分自身で体験して、この言葉がどんなに真実であるかをご存知だと思います。

二、困難な人生

では、病気になったら、必要なものが手に入らなかったら、どうなのでしょうか。それは、神の祝福を失ったことになるのでしょうか。神から見放されたことを意味しているのでしょうか。決してそうではありません。信仰を持つということは、どんな苦しみにも、トラブルにも、災いにも遭わないということではありません。どんなに信仰深い人も病気になります。さまざまなトラブルに巻き込まれます。貧しくなることもあります。

スイスの宗教改革者ジャン・カルヴァンは、フランスの若い学者でした。プロテスタントの信仰を持ったため弾圧を受け、スイスに逃れ、そこで改革者ギョーム・ファレルに要請され、ジュネーブでの宗教改革に加わりました。「要請された」とは言っても、それはカルヴァンには「脅迫」でした。カルヴァンは学者として静かに生涯を送りたかったのですが、宗教改革の嵐の中に引き込まれ、改革への反対や非難に何度も直面しました。

カルヴァンは家庭的には恵まれませんでした。カルヴァンの子どもは未熟児で生まれ、わずかしか生きられませんでした。夫人はそれから3年して病気になり、さら

に4年して亡くなりました。カルヴァンはその後、ずっと独り身で過ごしました。もともと丈夫な身体ではなかったカルヴァンは、晩年に、たくさんの病気をして、54歳で世を去っています。

神は、カルヴァンに平凡な人生ではなく、過酷な人生を歩ませました。4節に「死の陰の谷」、5節に「敵」とあるように、困難な中を歩み、苦しみに直面しました。しかし、カルヴァンは自分の生涯が惨めであったとは思いませんでしたし、そう考える人は誰もありません。神はカルヴァンを神の言葉の深い思索へと導き、彼は聖書に基づく神学の基礎を築きました。その後の神学者でカルヴァンの影響を受けていない人は誰もいないほどです。ジュネーヴの町は、信仰の自由を求めてやってきた人々の避難所となりました。

カルヴァンの紋章はハートを神に捧げている絵柄です。そこには “*prompte et sincere*”（速やかに、誠実に）というモットーが記されています。カルヴァンの著作には、神の栄光と神の恵みが強調されています。「恵み」とは、神の愛の一つの側面です。カルヴァンの魂はその恵みの愛に満たされていました。それで、神の栄光のためにすすんで自分の魂を捧げる紋章を作って、神への愛を言い表したのです。

神が私たちをあらゆる良い物で満たしてくださることを、私たちは信じています。しかし、だからといって、目に見えるものだけを求めてはいません。神は、乏しい時や困難な時も、私たちにお与えになります。しかし、

目に見えるものに不足しているように思えるとき、それは、神が見えない霊的な祝福を私たちの魂に注いでくださっているときです。ですから、私たちも言うのです。「たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。」（4 節）

三、人生の秘訣

「緑の牧場」や「いこいの水のほとり」は、すべてが満たされ、守られている順調な時のことを表します。「死の陰の谷」や「敵」は、人生の困難な時のことを言っています。詩篇 23 篇は、どちらの場合でも、主が私たちを守り、支え、必要を満たしてくださると言っています。「私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、私の頭に油をそそいでくださいます。私の杯は、あふれています。」（5 節）これは、神の恵みと祝福の豊かさをみごとに描いています。敵を前にして、すでに勝利の祝宴が準備されているのです。神は、私たちの頭に香油を注いで、大切なゲストとして迎えてくださいます。神が信じる者に注いでくださる恵みは、ほんの少しではありません。「私の杯は、あふれています」というほどに、それはじつに豊かなものです。

そして、この恵み、祝福は「主が共におられる」ことから来ています。聖書に登場する信仰者たちは皆、「主が共におられた」ので、大きな祝福を受けました。主がアブラハムと共におられたことは、周りの人たちも認めるところでした（創世記 21:22）。神はイサクにも、ヤコ

ブにも、「わたしはあなたとともにいる」（創世記26:24、28:15）と約束されました。ヨセフは奴隷に売られたり、牢獄に閉じ込められたりしましたが、どこででも、成功者となりました。聖書はこう言っています。「主がヨセフとともにおられたので、彼は幸運な人となり…彼の主人は、主が彼とともにおられ、主が彼のすることすべてを成功させてくださるのを見た。」（創世記39:2-3）、「しかし、主はヨセフとともにおられ、… 監獄の長は、ヨセフの手に任せたことについては何も干渉しなかった。それは主が彼とともにおられ、彼が何をしても、主がそれを成功させてくださったからである。」（創世記 39:21-23）

パウロはピリピ 4:11-12 でこう言っています。「私は、どんな境遇にあっても満ち足りることを学びました。私は、貧しさの中にいる道も知っており、豊かさの中にいる道も知っています。また、飽くことにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、あらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています。」どんな時にも満ち足りて、どんな境遇の中でも、それに縛られることなく、恐れなく生きる。その秘訣は何なのでしょうか。それは逆境に負けない強い意志を持つことでしょうか。順調なときに慎む謙遜を身に着けることでしょうか。いいえ、パウロがいう「秘訣」は悟りや修業など、ほんのひとにぎりの人しか得られないものではありません。それは、誰もが手にすることができるもの、信仰によって受け取ることができるものです。ピリピ 4:13 にその秘訣が書かれてい

ます。「私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。」順調な時も、逆境の時も、「私を強くしてくださる方」イエス・キリストが共におられる。これが、「どんな境遇にあっても満ち足りる」秘訣です。

「私の羊飼い」であるイエス・キリストが「共にいる」と言っておられるのに、なぜ、私たちは、まだ、恐れたり、これも足りない、あれも足りないと不平を言うのでしょうか。教会で何かの奉仕を頼まれて、「私は足りない者です。とてもそんなことはできません」と言う人があります。謙遜そうに聞こえますが、少し思い違いをしているようです。神のために何かをするのに、足りている人などどこにもいません。私たちはみな神の栄光に足りない者ばかりです。私たちが足りない者であることを一番ご存知なのは神です。しかし、神は、それをご存知でありながら、私たちを用いようとなさるのです。それは、私たちが自分の力で何事かを成し遂げたと言って、高慢にならないためです。人が褒め称えられないためです。イエス・キリストが私たちを用いて、ものごとを成し遂げてくださることを、私たちに教えるためです。神の栄光に足りない者を用いてご自分の栄光を表わす。これが神の方法です。

主は言われます。「恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。」（イザヤ 41:10）「わたしはあなた

と共にいる」と言われる主の言葉を信じましょう。そして、「わたしはあなたと共にいる」という言葉に、「あなたは私と共におられます」と言って、お答えしましょう。その時、私たちは、欠乏に替えて満足を、恐れに替えて平安を、弱さに替えて力を体験することができるのです。

（祈り）

主なる神さま、「緑の牧場」や「いこいの水」自体が私たちを満たすのではありません。私たちを満たしてくださるのは、あなたご自身です。ですから、私たちは死の陰の谷さえも、恐れずに歩むことができます。「恐れるな。わたしはあなたとともにいる」と語ってくださる主イエス・キリストに、「私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから」とお答えし、主が共におられることの恵みを体験する私たちとしてください。イエス・キリストのお名前で祈ります。

見つけ出した喜び
ルカ 15:1-7

15:1 さて、取税人、罪人たちがみな、イエスの話を聞こうとして、みもとに近寄って来た。
15:2 すると、パリサイ人、律法学者たちは、つぶやいてこう言った。「この人は、罪人たちを受け入れて、食事までいっしょにする。」
15:3 そこでイエスは、彼らにこのようなたとえを話された。
15:4 「あなたがたのうちに羊を百匹持っている人がいて、そのうちの一匹をなくしたら、その人は九十九匹を野原に残して、いなくなった一匹を見つけるまで捜し歩かないでしょうか。
15:5 見つけたら、大喜びでその羊をかついで、
15:6 帰って来て、友だちや近所の人たちを呼び集め、『いなくなった羊を見つけましたから、いっしょに喜んでください。』と言うでしょう。
15:7 あなたがたに言いますが、それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人にまさる喜びが天にあるのです。

皆さんは、忘れ物や失くし物をよくしますか。私などしょっちゅうです。出かけてから、忘れ物をしたことに気づいて家に引き返すこともあります。忘れ物の場合は、もとに戻ればいいのですが、失くし物の場合はやっかいです。あちらこちら探し回らなければなりませし、クレディット・カードや ID カードなどを失くすと手続きが大変です。しかし、あきらめかけていたものが出てきた時には、とてもうれしくなります。

ルカの福音書 15 章には、失くしたものが見つかった喜びが、たとえ話の形で書かれています。しかも、ひとつ

だけでなく、三つも書かれています。第一は、迷子になった羊を見つけた羊飼いの話、第二は、失くした銀貨を見つけた女の人の話、第三は、家から離れていった息子をとりもどした父親の話です。この三つのたとえには、失われたもの、捜し求めた人、そして失われたものを見つけた喜びが共通して描かれています。ルカ 15 章には、三つのたとえ話全体で、一つのメッセージが語られているのですが、きょうは、最初の「羊と羊飼いのたとえ」に集中して学びたいと思います。

一、失われた私たち

このたとえでは、「失われたもの」は「羊」です。「羊」は人間の姿を表しています。聖書は、羊が迷いやすいもので、人間も同じようだと言っています。詩篇 119:176 にこんな祈りがあります。「私は、滅びる羊のように、迷い出ました。どうかあなたのしもべを捜し求めてください。」イザヤ 53:6 には「私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った」とあります。ゼカリヤ 10:2 にも「テラフィムはつまらないことをしゃべり、占い師は偽りを見、夢見る者はむなしいことを語り、むなしい慰めを与えた。それゆえ、人々は羊のようにさまよい、羊飼いがいないので悩む」とあります。まことの神から離れ、偶像や占いに頼っている人々のことを言っています。

羊は家畜の中でも、賢くない動物です。遠くのものがよく見えません。視野が狭くて近眼なのです。においもよくかげません。ですから、自分で牧草や水を見つける

ことができません。足も速くありませんし、自分を守る牙や爪も持っていません。羊は、羊飼いなしには、自分を養うことができないばかりか、いつも命の危険にされされているのです。同じように、私たち人間も羊飼いである神から離れていることは、とても危険なことなのです。しかし、多くの人はそのことに気付かないまま、相変わらず、神に背を向けて歩き続けています。

人は、神の目から見れば「失われた者」なのですが、「失われた人」は、同時に「神を見失っている人」でもあるのです。神が創造されたすべてのものが、神がおられることを証言しているのに、それを聞こうとしません。神がおられることの証拠があっても、それを見ようともしません。そして、人は、神を見失うとき、自分を見失います。自分が何者なのか、どこから来て、どこへ行くのか、なぜ、ここに生きているのか、何のために生きるのかを見失っているのです。

ある人は言うでしょう。「別に神を信じなくても、毎日楽しく暮らしていれば、それでいいではないか。」しかし、順調な日々が生涯続く保証はどこにもありません。いつ重い病気に見舞われるか、経済的に破綻するか分かりません。家庭の中に問題が起こって家族がばらばらになることもあります。神の守りがなければ、お金や、財産などいった目に見えるものに依存した「幸せ」はすぐに消えてしまいます。信仰がなければ、人は、思い煩いや不平不満に、簡単に陥ってしまいます。思い煩いが重なると不安になり、不安が重なると恐怖になりま

す。そうしたことから心や身体の病気になるのです。落胆を繰り返すと失望になり、失望を繰り返すと絶望になって、生きる喜びを見失ってしまうのです。

たとえ、平穏で順調な人生であっても、神から離れたままで、本当に意義のある日々を送ることはできません。人間だけが味わうことのできる魂の満足や喜びは得られません。また、困難や苦しみの中でも押しつぶされない力を得ることもできないのです。私たちは、羊と同じように、自分の力では「緑の牧場」や「いこいの水」にたどり着くことはできません。そこに導いてくださるのは、羊飼いであるイエス・キリストです。「主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。」（詩篇 23:1-2）とある通りです。神を見失い、自分を見失っている人、つまり「失われた人」は、満ち足りた人生、豊かな命をも見失っているのです。

二、捜し求める主

このたとえで失われたものを捜し求めた人、つまり、羊飼いは、イエス・キリストです。

このたとえ話で、羊飼いが、百匹の羊のうち一匹がいないことに気づいたのは、羊を囲いに入れるときだったと思います。私は、これを子どもに話すとき、こう言っていました。「羊飼いが羊を百匹持っていました。夕方になって、羊を羊たちのお家に入れました。『一匹、二匹、三匹、…九十八匹、九十九匹。あれ、一匹足りないぞ。…』」でも、それは間違いだということに気付きま

した。といいますのは、羊飼いは、たとえ羊が五十匹いても、百匹いても、一匹一匹に名前をつけて、名前で呼んでいたからです。そのことを知ってから、私は、「シロ、ブチ、チョロ、クロ、…チビ、さあ、お家にお入り！あれ、チビがいないぞ。…」などとお話しするようにしました。

イエス・キリストは、私たちを名前で呼んでくださいます。かつては、囚人になると、名前を奪われ、囚人番号で呼ばれました。それは大きな屈辱でした。主は、世界に八十億の人々がいても、人々を数で数えたり、番号で呼んだりはなさいません。主は、私たち一人ひとりを「八十億分の一」としてではなく、かけがえのない人格として扱い、名前で呼んでくださるのです。たとえ、自分は「百匹の中の一匹」のような者で、「八十億分の一」のような存在でしかないと思っていたとしても、主は、その人の名前を呼んで、捜し求めてくださるのです。

羊飼いが羊を囲いに入れるのはたいてい夕暮れです。夕暮れになってから野山に出ていくのは、羊飼いにとっても危険なことでした。しかし、羊飼いは「他に九十九匹いるのだから、一匹くらい失ってもしかたない」とは考えませんでした。危険を冒してでも、いなくなった一匹を熱心に捜し求めました。

きょうの箇所から生まれた讃美歌に「九十九匹の羊は」（新聖歌 217）という歌があります。こう、歌われています。

九十九匹の羊は檻にあれども
戻らざりし一匹は何処に行きし
飼い主より離れて奥山に迷えり、奥山に迷えり

「九十九匹もあるなり主よ良からずや」
主は答えぬ「迷いし者も我がもの
如何に深き山をも分け行きて見出さん、分け行きて見出さん」

4節目には、こうあります。

「主よ山道を辿る血潮は何ぞ」
「そは一匹の迷いし者の為なり」
「御手の傷は何故」「茨にて裂かれぬ、茨にて裂かれぬ」

失われた羊のために、羊飼いが傷つき、血を流したことが歌われていますが、イエスは実際に、鞭打たれ、頭に茨の冠を被せられ、十字架に両手両足を釘付けにされ、血を流されました。それほどまでに、失われた者を捜し求めてくださるお方は、誰か他にいるでしょうか。イエス・キリストの他、誰もありません。

三、見つけ出した喜び

このたとえ話は「喜び」で終わっています。5節と6節にこうあります。「見つけたら、大喜びでその羊をかついで、帰って来て、友だちや近所の人たちを呼び集め、『いなくなった羊を見つけましたから、いっしょに喜んでください』と言うでしょう。」この羊飼いは、失われたものを取り戻した喜びを、自分ひとりだけにとどめておくことはできませんでした。失われたものを見つけ出した喜びは、それほどに大きいのです。

それからイエスは、「あなたがたに言いますが」と、厳かな前置きをして、「それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人にまさる喜びが天にあるのです」（7節）と言いました。ここで、「あなたがた」と言われているのは、パリサイ人や律法学者たちのことです。パリサイ人や律法学者たちは、人は律法を守ることによって神に受け入れられると主張していました。自分たちは律法を守って正しい生活をしており、神のそば近くにいるのだと思い込んでいました。自分の罪を認め、それを悔い改めることによって、神に立ち返ることができるという恵みを知らず、また、知っても、それを受け入れませんでした。素直に悔い改め、神に立ち返った人たちが、イエスを自分の家に招き、食事を共にしてそれを喜びあっているのを見て、非難したのです。

このパリサイ人や律法学者の非難は、イエスに従っていた人たちに対してだけではありませんでした。彼らは、「この人は、罪人たちを受け入れて、食事までいっしょにする」（2節）と言って、イエスをも非難しています。このたとえでは、人々の「見出された喜び」よりも、主が失われた人々を「見出した喜び」が描かれています。このたとえで強調されているのは、羊を見つけ出した羊飼いの喜びです。神に立ち返った者が神を喜ぶことにまさって、主イエスが、神に立ち返った者を喜んでくださっています。このたとえでイエスは、ご自分を、失われた一匹を見つけ出した羊飼いになぞらえ、主が、

どんなにか私たちを喜んでくださっているかを、伝えようとされたのです。

「ひとりの罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人にまさる喜びが天にあるのです。」失われた人が見出される、その喜びは地上だけのものではありません。天の喜びです。天では絶え間なく賛美が捧げられていますが、地上で誰かひとりでも神に見出されなら、天の賛美は、さらに大きなものになります。律法学者やパリサイ人は、この天の喜びに逆らい、自らを神の喜びから遠い者にしているのです。

「人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです。」（ルカ 19:10）これは、イエスがザアカイに言われた言葉です。ザアカイは、イエスを求め、イエスを一目見たいと願っていました。けれども、ザアカイを先に見つけ、彼の名を呼んだのは、イエスでした。ほんとうは、人間の側から、主を呼び求め、主を捜し求めるべきなのですが、実際は、いつでも、主のほうから、人間を呼び求め、捜し求めてくださっています。私たちが主の名を呼び求め、私たちに主を求める思いが与えられているのは、主が私たちを捜し求めておられるからなのです。ですから、私たちも主を求め続けましょう。必ず、主に見出されます。「あなたがたは、羊のようにさまよっていましたが、今は、たましいの牧者であり監督者である方のもとに帰ったのです」（ペテロ第一 2:25）とあるように、主のもとに連れ戻されます。羊飼いであるイエスのもとで守られ、養われ、導かれます。私たちの

「見出された喜び」と、主の「見出した喜び」とが出会います。そのとき、私たちは、大きな天の喜びに満たされるのです。

（祈り）

父なる神さま、あなたは、罪を犯してあなたから離れた人間をご自分のもとに連れ戻そうと、絶えず人々に呼びかけてこられました。時が来て、あなたは、御子イエスを遣わし、イエスは、あなたのもとから迷い出た私たちを探し求め、私たちを見出し、そのことを最高の喜びとして喜んでくださっています。この恵みに心から感謝します。どうぞ、さらに多くの人が、あなたに見出され、あなたの牧場に帰ることができますよう、導き助けてください。イエス・キリストのお名前で祈ります。

Penguin Club
www.penguinclub.net